第２章　古墳をめぐる環境

１　古墳の位置と地形

倉吉市は鳥取県のほぼ中央部に位置する。南は岡山県境をなす中国山地に接し、北は日本海に近い。市域の西側には中国地方最高峰の大山（標高 1,729 m）が形成したゆるやかな起伏をもつ火山性の丘陵（久米ヶ原丘陵や天神野丘陵）が広がる。北側には、四王寺山や蜘ヶ家山、向山、大平山などの標高 200 m以下の丘陵性山地が横たわる。山地および丘陵間にはいくつかの河川が流下し、西部では国府川に、南部では小鴨川に集約され、市域東端部近くで竹田川と合流して天神川となり、日本海に注ぐ。

伯耆国分寺古墳は、市街地から北西へ約３㎞離れた国府字東ノ前に所在する。現国分寺本堂の背後に位置し、国府川左岸の微高地（標高 20 ～ 21 m）に立地する。周囲には国府川が造りだした沖積平野が広がり、肥沃な水田地帯となっている。水田面との比高差は１～２ｍである。西方には伯耆国府跡や伯耆国分寺跡といった古代伯耆国の行政・経済・文化の中枢をなす施設が集中する久米ヶ原丘陵が広がり、北方には四王寺山（標高 171.4 m）が横たわる。伯耆国分寺古墳はそれらより標高が低く、前期古墳としては異例の立地である。選地の理由として、この地が中国山地を越えて吉備へ通じる陸路の起点であることに加え、西方の西伯耆や出雲、東方の因幡を結ぶ道路（のちの山陰道）に沿った交通の要衝であったことが指摘されている〔名越 1996b〕。

２　周辺の遺跡

伯耆国分寺古墳の所在する倉吉市西郊には、四王寺山周辺や久米ヶ原丘陵上に多くの遺跡が分布する。以下、第３図の範囲を中心に、旧石器時代～奈良・平安時代の遺跡の概要を述べる（第３図）。

旧石器時代　市内で遺構は確認されていないが、発掘調査によって遺物が出土している。中尾遺跡では黒曜石製の瀬戸内技法を用いた国府型ナイフ形石器が出土しており、上神 51 号墳の墳丘盛土より船底形細石刃石核１点（黒曜石製）が出土している〔市教委 1992b〕。ともに黒曜石の産地は隠岐島である〔根鈴 1996a〕。

縄文時代　早期以降に丘陵上で居住にかんする遺構が確認されている。取木遺跡では早期の竪穴建物跡１棟と屋外炉と考えられる礫群２基を、津田峰遺跡では後期の石囲炉を備えた竪穴建物跡１棟を検出している〔市教委 1985c、森下 2017a〕。

県内では大山山麓を中心に 4,000 基におよぶ落し穴の遺構が確認されている〔中四国縄文研究会 2013〕。市内では中尾遺跡（159 基）、長谷遺跡（57 基）や夏谷遺跡（28 基）などで多くの落し穴が調査され、丘陵上を狩猟場として利用していたようすがうかがわれる〔市教委 1992b・1995a・1996a・2017〕。

埋葬や祭祀にかかわる遺構としては、松ヶ坪遺跡で晩期の配石遺構と甕棺墓１基が確認されている〔森下 2017b〕。

弥生時代　集落遺跡は四王寺山周辺や久米ヶ原丘陵などの丘陵上に多く分布し、竪穴建物と掘立柱建物、貯蔵穴で構成されることが多い。前期後葉には、中尾遺跡で屋内貯蔵穴４基を備える平地建物跡１棟がみられる〔市教委1992b〕。中期には、中尾遺跡に加え、四王寺山南東側の東前遺跡や沢ベリ遺跡、久米ヶ原丘陵上の中峯遺跡や遠藤谷峯遺跡、福田寺遺跡、ほかに高原遺跡や後中尾遺跡と分布が広が

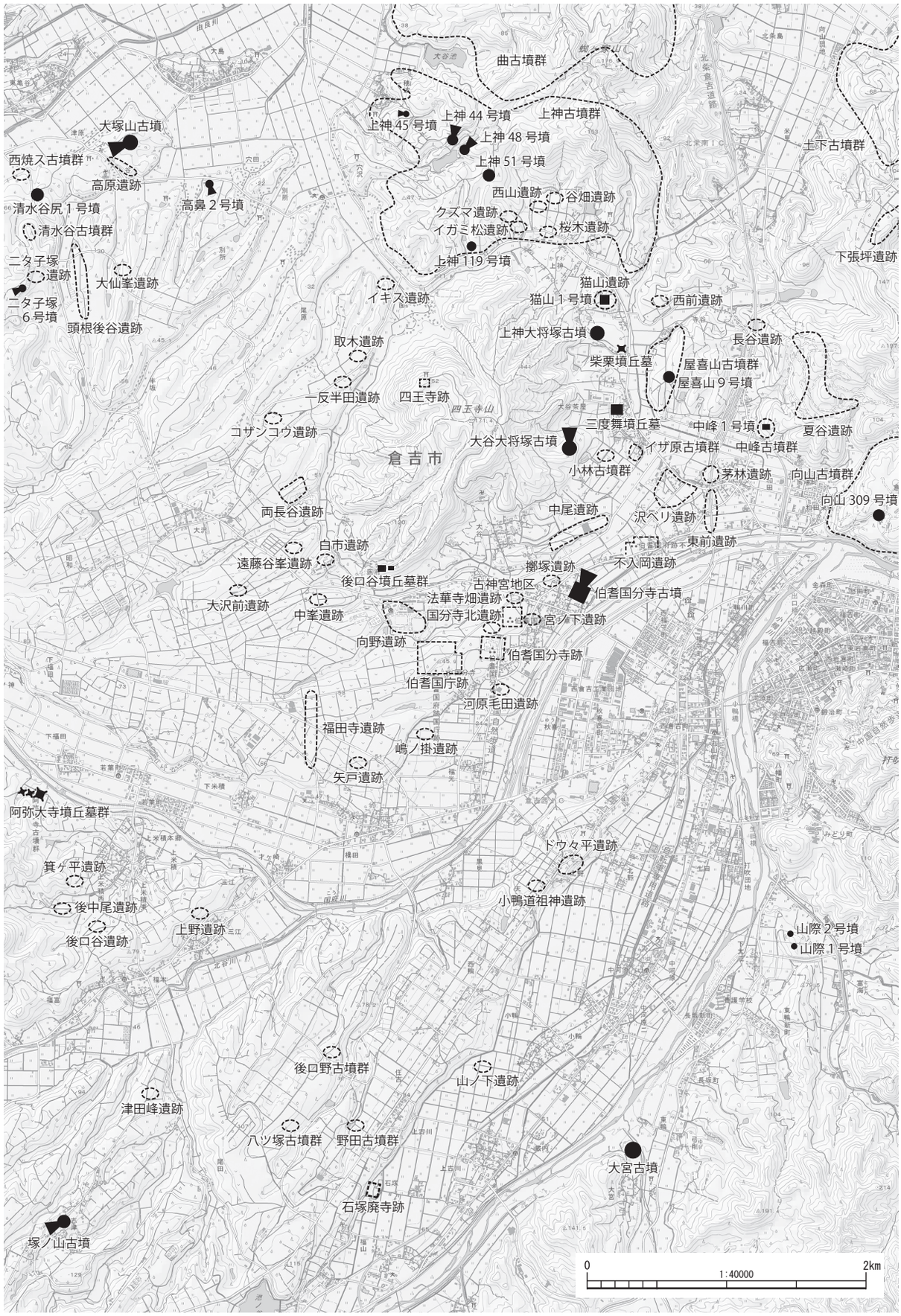
る。東前遺跡では中期中葉の竪穴建物跡３棟より管玉未成品・碧玉剥片・石針・石鋸・砥石などの玉作遺物と石器製作遺物が数多く出土し、玉や石器を製作した工房跡と考えられる〔市教委 2012〕。また、後中尾遺跡では中期～古墳時代の竪穴建物跡 118 棟や貯蔵穴 52 基が確認され、中期には数基の竪穴建物群からなる４つの小集団とそれらを取り囲むようにめぐる溝からなる環濠集落であったことがわかっている〔市教委 1985a〕。

後期には集落遺跡が増大する。中期の遺跡に加え、四王寺山南東側には不入岡（ふにおか）遺跡や茅林（かやばやし）遺跡、西側には両長谷（りょうながたに）遺跡やコザンコウ遺跡、さらに久米ヶ原丘陵上に白市（しろいち）遺跡や大沢前（おおさわまえ）遺跡、矢戸（やと）遺跡があり、それら以外にも夏谷遺跡や下張坪（しもはりつぼ）遺跡などがある。コザンコウ遺跡では３棟の竪穴建物が広場を中心に建てられ、それぞれに掘立柱建物跡１棟と貯蔵穴１基がともない、柵列や溝により境界が設けられている〔竹中 1996〕。この構成はこの時期における居住単位の典型例であるとして評価される〔高田 2003〕。高原遺跡では、中期～後期の竪穴建物跡 16 棟と後期末頃の土壙墓 38 基が調査され、竪穴建物跡からガラス小玉や破鏡が出土した〔市教委 2002〕。

弥生時代の墳墓のうち前期のものは、イキス遺跡で 16 基の土壙墓や木棺墓が調査されている〔市教委 1989a〕。また、向山（むこうやま）古墳群宮ノ峰（みやのみね）支群では４基の古墳の墳丘下より、160 基以上の土壙墓や木棺墓が検出されている〔名越 1996a〕。これほどの規模の集団墓は県内では例をみないものである。

後期になると、国府川右岸の低丘陵上に、大小３基の四隅突出型墳丘墓が並ぶ阿弥大寺（あみだいじ）墳丘墓群（国指定）が築造される〔市教委 1981〕。墳丘は削平されているが突出部を除いた墳丘規模は、１号墓は一辺約 14 m級、２・３号墓は約７m級である。墳丘には盛土がなされ、墳丘斜面と突出部には扁平な川原石による貼石がほどこされる。１号墓の埋葬施設は２基で、１号主体部は長さ 3.7 m以上、幅 1.7 mの木棺墓、２号主体部は長さ 2.5 m、幅 0.9 mの土壙墓である。墳丘外には大小 12 基の土壙墓が設けられていた。主体部からの副葬品はなく、供献された壷・甕・高坏・器台・ミニチュア土器が墳丘上や突出部から出土した。一方、四王寺山裾部には柴栗（しばぐり）墳丘墓や後ロ谷（うしろだに）墳丘墓群、三度舞（さんどまい）墳丘墓（市指定）が築造された〔市教委 1986b・1992a、名越 1996a〕。柴栗墳丘墓は盛土を確認していないが、墳丘裾に貼石がほどこされ、四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されている。墳丘を取り囲むように、後期の土壙墓や木棺墓 32 基が検出されている。後ロ谷墳丘墓群は台状墓で、２基が調査され、１号墳丘墓は東西 13.7 m、南北 11.5 m、高さ 1.5 mを測る。埋葬施設は５基あり、中心主体部は長さ 3.9 m、幅 2.5 mの木棺墓である。さらに墳丘上や周辺に 10 基の土壙墓が設けられていた。棺内からの副葬品はなく、墳頂部から供献された壷・甕・高坏・器台などが出土した。出土品には吉備系の大型壷が含まれる。三度舞墳丘墓は方形を呈し、現状では東西 21 m、高さ 2.5 mを測る。墳頂部に川原石が敷かれ、その上面に多数の土器が置かれていたとされるが、現在は小型の壷と手焙形土器のみが伝わる。

二タ子塚（ふたごづか）遺跡と中峰古墳群では、弥生時代のおわりから古墳時代のはじまりにかけての墓制の変化を確認できる〔市教委 1995b・1998a〕。二タ子塚遺跡では、まず丘陵頂部に後期後葉～末の土壙墓 10 基が造られる。土壙墓群の墓域は三方を４条の溝によって方形に区画される。その後、丘陵頂部より下った場所に、カスガイ状の周溝をもつ方墳５基（一辺 4.3 m～ 12.5 m）が周溝を接して連続して造られる。一方、中峰古墳群では、まず丘陵南斜面の尾根筋に後期後葉～末の土壙墓 27 基が造られる。土壙墓群は３小群に分けられ、小群は溝によって区画され、尾根筋の高位から低位へと比較的短期間に形成されている。その後、最後の小群より南側（低位）にカスガイ状の周溝をもつ方墳１基（一辺 12.6 m）が造られ、さらに低位に同じく方墳３基（一辺 3.0 m～ 9.3 m）が周溝を共有して造られる。二タ子塚遺跡と中峰古墳群では、このように、集団墓としての土壙墓群から一墳一葬の方墳へと連続し


曲古墳群
上神 44 号墳
上神古墳群
上神 45 号墳
上神 48 号墳
上神 51 号墳
大塚山古墳
西焼ス古墳群
高原遺跡
高鼻 2 号墳
清水谷尻 1 号墳
清水谷古墳群
西山遺跡
谷畑遺跡
クズマ遺跡
イガミ松遺跡
桜木遺跡
上神 119 号墳
土下古墳群
下張坪遺跡
二タ子塚遺跡
大仙峯遺跡
二タ子塚 6 号墳
頭根後谷遺跡
イキス遺跡
猫山遺跡
猫山 1 号墳
西前遺跡
上神大将塚古墳
長谷遺跡
取木遺跡
柴栗墳丘墓
屋喜山古墳群
屋喜山 9 号墳
一反半田遺跡
四王寺跡
四王寺山
三度舞墳丘墓
中峰 1 号墳
夏谷遺跡
コザンコウ遺跡
大谷大将塚古墳
イザ原古墳群
中峰古墳群
倉吉市
小林古墳群
茅林遺跡
向山古墳群
向山 309 号墳
両長谷遺跡
中尾遺跡
沢ベリ遺跡
白市遺跡
東前遺跡
遠藤谷峯遺跡
不入岡遺跡
後口谷墳丘墓群
古神宮地区
擲塚遺跡
伯耆国分寺古墳
大沢前遺跡
法華寺畑遺跡
中峯遺跡
国分寺北遺跡
宮ノ下遺跡
向野遺跡
伯耆国分寺跡
伯耆国庁跡
河原毛田遺跡
福田寺遺跡
嶋ノ掛遺跡
矢戸遺跡
阿弥大寺墳丘墓群
ドウ々平遺跡
箕ゲ平遺跡
小鴨道祖神遺跡
後中尾遺跡
上野遺跡
後口谷遺跡
山際 2 号墳
山際 1 号墳
後口野古墳群
山ノ下遺跡
津田峰遺跡
八ツ塚古墳群
野田古墳群
大宮古墳
石塚廃寺跡
塚ノ山古墳
0
1:40000
2km

第３図　周辺の遺跡

て変化するようすを追うことができる好例である。

古墳時代　県内には13,000基以上の古墳が分布する。そのうち東伯耆には約5,000基、市内には約2,900基が分布し、向山丘陵（約600基）や大平山（約300基）、土下山（約300基）、蜘ヶ家山裾部の上神地域（約300基）などに密集することが知られる。

前期の首長墳としては、４世紀初頭、国府川左岸の微高地に伯耆国分寺古墳（前方後円墳ないし前方後方墳・全長約60ｍ）（市指定）が築造される。その後、四王寺山周辺では上神大将塚古墳（円墳・直径約25ｍ）（市指定）や大谷大将塚古墳（前方後円墳・全長約50ｍ）が続く。上神大将塚古墳の埋葬施設は箱式石棺と考えられ、「仿製」三角縁神獣鏡１面や鍬形石、琴柱形石製品、鉄製武器・農工具など畿内色の強い副葬品が出土している〔名越1996b〕。大谷大将塚古墳は、葺石・埴輪は未確認で、埋葬施設は箱式石棺ないし竪穴式石槨の可能性が指摘されている〔名越1996b〕。また、向山では、４世紀前半に宮ノ峰19号墳（方墳・一辺27ｍ）が造られ、次いで宮ノ峰21号墳（円墳・直径30ｍ）が造られる〔根鈴1991、名越1996b〕。いずれも盗掘により埋葬施設の遺存状況は悪い。19号墳の埋葬施設は幅0.8ｍの竪穴式石槨で、石槨内より鉄鏃２点が出土している。21号墳の埋葬施設は、長さ4.3ｍ、幅0.6ｍの定型化した竪穴式石槨で、粘土床をともない、床面には朱が付着していた。棺は遺存していなかったが、割竹形木棺と推定される。

四王寺山北東側の猫山遺跡では、４世紀後葉頃の古墳30基（方墳16基・円墳14基）が調査されている〔市教委1980〕。このうち方墳はカスガイ状の周溝をもち、隣接する方墳と周溝を共有し、連続して築造された特徴的なものである。１号墳は一辺16ｍの方墳で、埋葬施設は長さ２ｍ、幅0.3～0.5ｍの箱式石棺である。石棺の周囲には板石が小口積みされ、竪穴式石槨を模したような造りである。このような石棺は、中峰１号墳（方墳・12.5ｍ×9.0ｍ）や夏谷３号墳（方墳・18.2ｍ×15.7ｍ）に類例がみられる〔市教委1996a・1998a〕。

中期になると、小型の円墳の数が増加する。四王寺山周辺ではイザ原古墳群や沢ベリ遺跡、屋喜山古墳群があり、ほかに夏谷遺跡や下張坪遺跡、頭根後谷遺跡などがある。イザ原古墳群では５世紀後半～末の円墳22基が調査され、丘陵上に密集した古墳群が計画的に築造されていたことがわかっている〔市教委1983a〕。沢ベリ遺跡では５世紀後半以降の古墳28基（円墳19基・帆立貝式古墳５基・前方後円墳１基・方墳２基・不明１基）が調査され、古墳群は周溝を共有するように密集し、墓道に規制されたように墳丘や埋葬施設が配置されていた〔市教委1996b・2009〕。屋喜山古墳群では箱式石棺を埋葬施設とする古墳９基が調査され、９号墳（円墳・直径20ｍ）では竪櫛11点や玉類、鉄製武器を含む副葬品が出土した〔市教委1983b〕。下張坪遺跡では丘陵上に密集する円墳67基が調査されている〔市教委1997a〕。

後期には古墳が爆発的に増加する。向山や大平山、土下山、蜘ヶ家山の周辺にみられる群集墳の多くが、この頃に築造されたと推定される。四王寺山周辺では小林古墳群や西山遺跡、クズマ遺跡が調査され、小林古墳群では６世紀初頭～中葉の円墳５基が確認されている〔市教委1982a〕。西山遺跡では５世紀代の方墳１基と６世紀代の円墳11基が調査され、２号墳（円墳・直径約14ｍ）の周溝底より馬形埴輪と馬子と推定される人物埴輪の足部が並んで出土した〔市教委1984c〕。

６世紀中頃には、小鴨川右岸の大宮古墳（円墳・直径約30ｍ）（市指定）を嚆矢として、小鴨川流域に横穴式石室が導入される。大宮古墳の横穴式石室は全長5.2ｍ、玄室は長さ2.6ｍ・幅2.3ｍを測る〔市教委1979〕。石室の構造は、基底石の上部に平石を小口積みにして持ち送り、天井部をドーム状とする。玄室内には仕切石や石棚を設け、床面には小円礫を敷く。大宮古墳の石室を簡略化したような石室が、家ノ後ロ１・２号墳（市指定）や山際１・２号墳にみられ、小鴨川右岸の小河川合流地点付近の丘陵

上に展開する〔根鈴 1996b〕。一方、竪穴系横口式石室の系統の石室も確認されており、四王寺山南側の中尾遺跡や向山の養水１号墳にみられる〔市教委 1989a・1992b〕。

６世紀後半～７世紀中頃には、向山６号墳（前方後円墳・全長 40 m）や三明寺古墳（円墳ないし方墳・直径 18 m）（国指定）、福庭古墳（円墳ないし方墳・直径 35 m）（県指定）において、巨石を用いた横穴式石室が造られる〔市史編纂委 1973〕。これらの首長墳は向山６号墳→三明寺古墳→福庭古墳の順に築造されたと考えられる。一方で、７世紀代には横穴式石室の小型化も進み、追葬可能な石室から個人の埋葬を目的とした小石室へ変容する〔根鈴 1996b〕。四王寺山周辺では取木遺跡や一反半田遺跡、両長谷遺跡で小型横穴式石室が調査されている〔市教委 1985c・1997b〕。

古墳時代の集落遺跡は、弥生時代と同様に竪穴建物と掘立柱建物で構成される。四王寺山周辺では西山遺跡や桜木遺跡、クズマ遺跡、猫山遺跡があり、ほかに夏谷遺跡や後中尾遺跡、後ロ谷遺跡、箕ヶ平遺跡などがある。四王寺山北側の低丘陵上に位置する西山遺跡では６世紀代の竪穴建物跡 37 棟、貯蔵穴 10 基、溝状遺構１条と５～６世紀代の古墳 12 基が確認されている〔市教委 1985d〕。時期を同じくする集落と古墳群が同一丘陵に分かれて営まれ、居住域と墓域のあり方を示す。また、溝状遺構は谷へ下りる道の可能性があり、谷を下った場所に位置する祭祀遺跡の谷畑遺跡との関係が指摘される〔市教委 1985b〕。桜木遺跡は、谷畑遺跡のある谷を挟んで、西山遺跡と隣の低丘陵上に位置し、３世紀末～４世紀代と６世紀代の竪穴建物跡 26 棟、掘立柱建物跡３棟、貯蔵穴２基が確認されている〔市教委 1985d〕。西山遺跡と桜木遺跡は１つの集落として機能していたと考えられる。

祭祀にかんする遺跡には、６世紀末～７世紀前半の谷畑遺跡やクズマ遺跡、イガミ松遺跡がある。谷畑遺跡では人形や動物形をはじめとする小型の土製品が 400 点以上出土し、国指定重要文化財となっている〔市教委 1985b〕。クズマ遺跡では人形１点や土馬 12 点、小型の土器 58 点、カマドの破片数点が出土している〔眞田 1988〕。３つの遺跡は近接しており、上神地域の特性がうかがわれる。

奈良・平安時代　久米ヶ原丘陵東端部に伯耆国庁跡（国指定）、伯耆国分寺跡（国指定）、大規模な官衙がのちに国分尼寺に転用されたと考えられる法華寺畑遺跡（国指定）、前身国庁が後に国倉院へ転換された不入岡遺跡（国指定）などが同一の丘陵上に連なるように造営され、国庁跡一帯はまさに古代地方行政・経済・文化の中枢として整備された。また、国庁跡周辺では道路の整備もおこなわれており、国庁跡及び宮ノ下遺跡、河原毛田遺跡、国分寺北遺跡、向野遺跡などで道路遺構が検出されている。このうち、河原毛田遺跡は古代山陰道の側溝の可能性がある〔市教委 1998c〕。

伯耆国内では白鳳時代から奈良時代に造営された古代寺院跡が 13 ヶ寺あり、日野郡を除く各郡に１ないしは数ヶ寺分布する。久米郡内には伯耆国分寺跡をはじめ、大御堂廃寺跡（久米寺）（国指定）、石塚廃寺跡（塔跡：県指定）、藤井谷廃寺跡（市指定）が造営された〔眞田 1996〕。

この時期の集落遺跡には、四王寺山南側の中尾遺跡、久米ヶ原丘陵上の中峯遺跡や向野遺跡、宮ノ下遺跡、擲塚遺跡、矢戸遺跡、嶋ノ掛遺跡、ほかに西前遺跡や観音堂遺跡、ドウ々平遺跡などがある。このうち、観音堂遺跡は７世紀後半～８世紀前半の竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落である〔市教委 1986b〕。ドウ々平遺跡では７～ 10 世紀を中心とした建物群が調査され、８世紀後半に竪穴建物から掘立柱建物に移行することが確認されている〔市教委 2016〕。向野遺跡は７世紀～９世紀の掘立柱建物のみで構成された集落である〔市教委 2003〕。

古代の墓としては、向山の長谷遺跡で板石を方形に組んだ横穴式石室状の石槨内に蔵骨器２個が納められた８世紀後半の火葬墓が確認されている〔市教委 1995a〕。

3　既往の報告と梅原考古資料

伯耆国分寺古墳の遺構や遺物の出土状況にかかわる情報は、『因伯二國における古墳の調査』〔梅原1924〕に頼らざるを得ない。これに加えて、梅原報告の執筆の基礎となったであろうデータが公益財団法人東洋文庫所蔵の梅原考古資料にある。そこで本節では、梅原報告と梅原考古資料をもとに、古墳としての伯耆国分寺古墳がもつ情報を可能なかぎり整理することにしたい。

（1）『因伯二國における古墳の調査』における報告内容

1924（大正13）年に鳥取縣史蹟勝地調査報告第２冊として鳥取県から刊行された『因伯二國における古墳の調査』〔梅原1924〕こそ、伯耆国分寺古墳の基本文献である。ここでは、梅原報告の記述内容の要点を確認することとしたい。

墳　　丘　円丘部が直径33m以上、高さ７m以上の規模を有すること、円丘部から約７m離れた地点に約15m×約９mの高さ約1.5mの方丘部が存在することを重視して、円墳ではなく、前方後円墳である可能性を指摘する（第５・10図）。外表施設としての葺石と埴輪はともなわないとする。

埋葬施設　長さ約7.3m、幅約1.8mの粘土槨ような埋葬施設と報告する。主軸は東西に近い方向をとる。被覆粘土は10cmに満たない厚さであったらしい。東小口の長さ90cmほどの範囲に、割石を粘土とともに２～３重に積み重ねる構造をもつ（第４・５図）。木棺は断面が浅いＵ字形の痕跡をとどめ、長さは6.7m程度、幅が1.35mと広く、深さは45cmほどの舟形であったという。

さらに、この木棺埋葬とは別に「箱式棺」が存在したことも述べられている。

遺物の出土状況　詳細については明らかでない部分が多いが、木棺の中央よりに鏡３面が点在し、その近くに剣身が存在したという（第５図）。鏡は東側の２面が八鳳鏡と三角縁神獣鏡、西側の１面が同向式二神二獣鏡であったらしい。３面の鏡から西側へ少し離れた地点に棒状の鉄製品、東側には刀剣類があり、東小口の割石積みに接して鉄鎌や鉄斧が出土したと報告される。

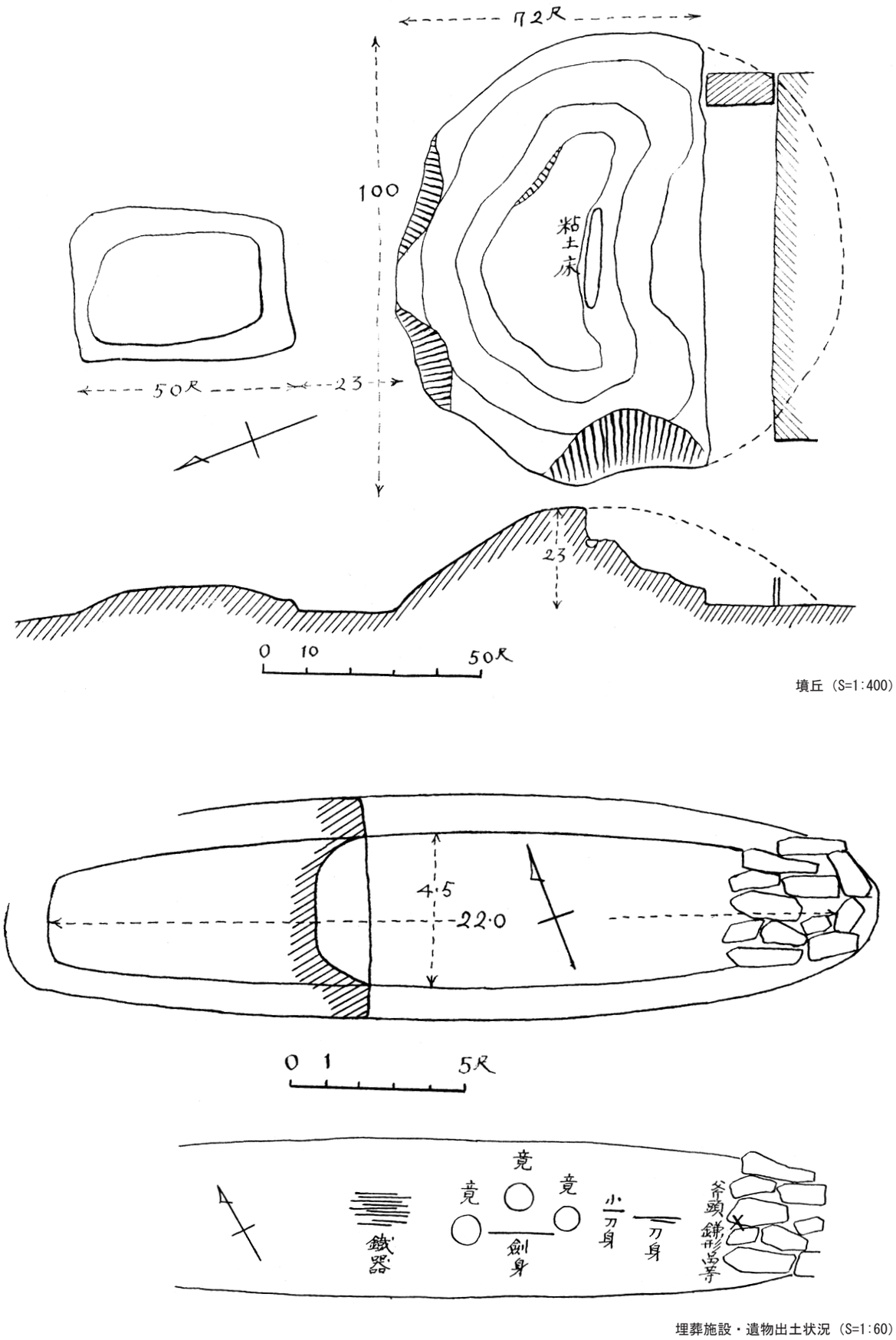
また、木棺埋葬とは別の箱式棺からは刀剣や鉄鏃が多数出土したとされる。

第４図　梅原報告にある埋葬施設の写真

（2）梅原考古資料の記載

『因伯二國における古墳の調査』にみる伯耆国分寺古墳の報告の基礎資料が、梅原考古資料にある。記録類は、手島道雄の書簡、倉光清六の書簡、梅原末治の調査カード、写真、図面の版下で構成される。それぞれの分量は、手島書簡が３葉、倉光書簡が８葉、梅原資料カードが10枚、写真４枚、版下２枚である。

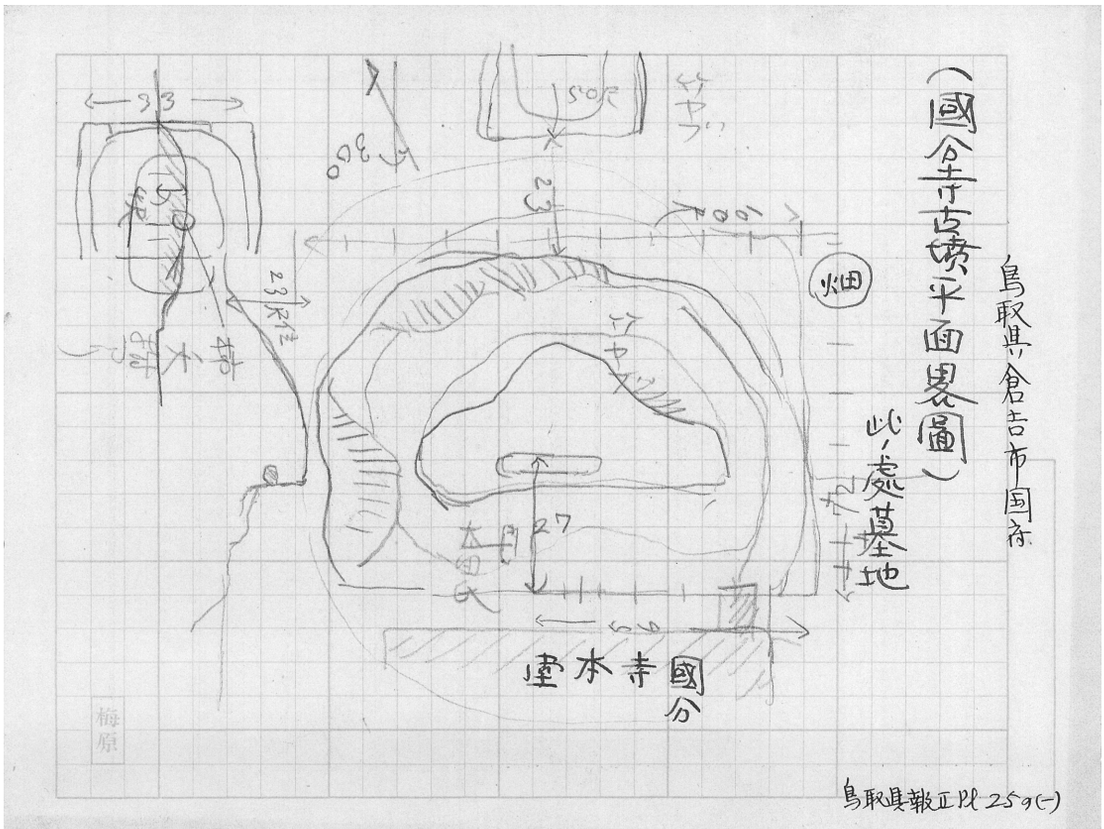
以下では、『因伯二國における古墳の調査』にはないが、これら梅原考古資料中にある伯耆国分寺古墳にかかわるとくに重要と思われる記述についてとりあげておきたい。



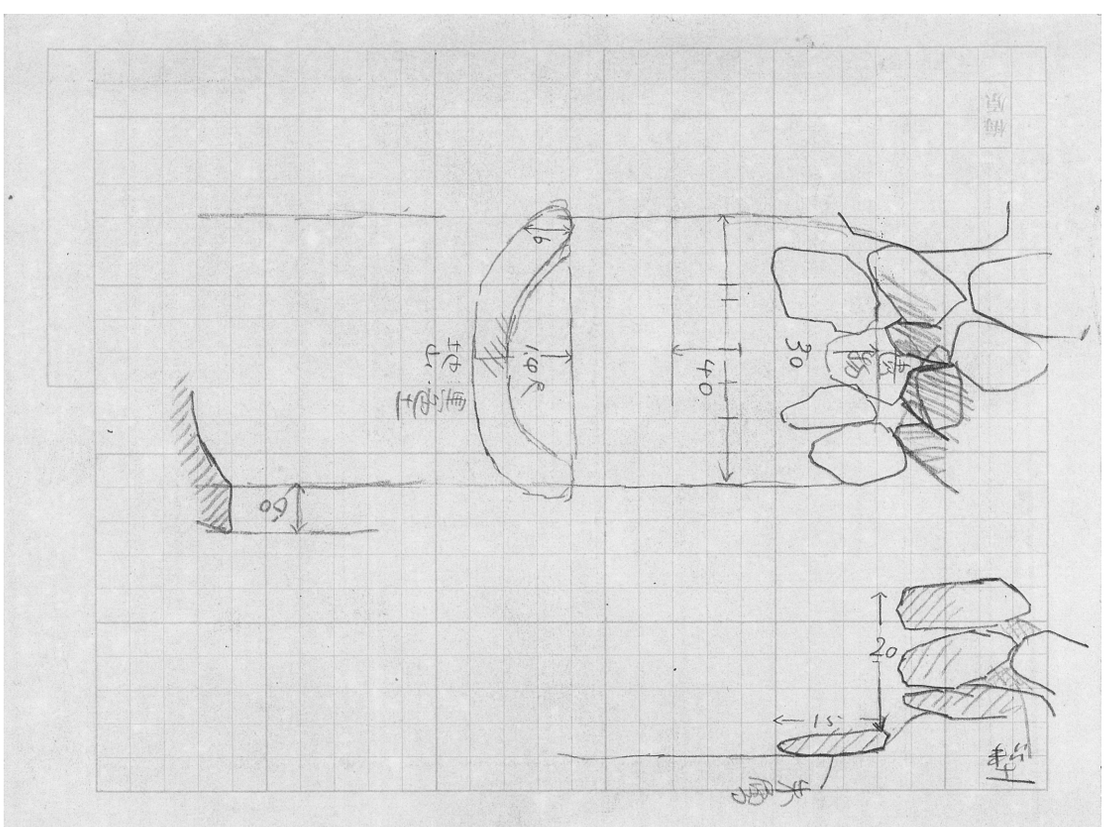
墳丘（S=1:400）

埋葬施設・遺物出土状況（S=1:60）

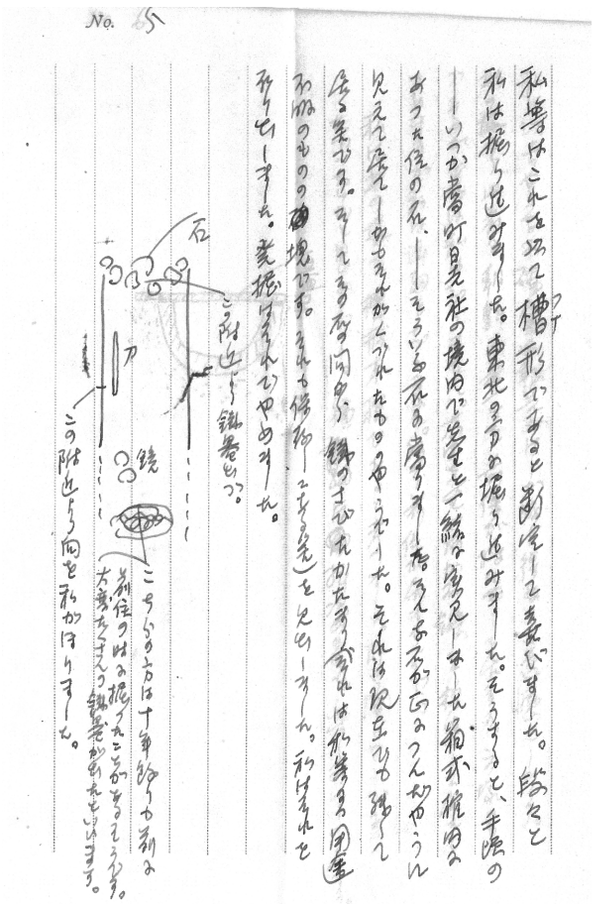
第５図　梅原報告にある墳丘と埋葬施設の図面



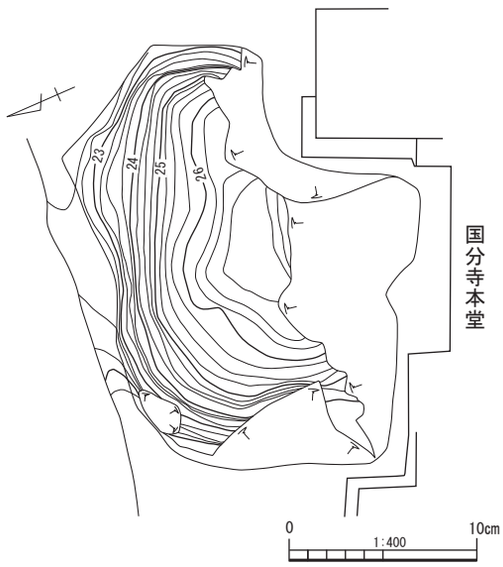
第６図　梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）の資料カード（１）



第７図　梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）の資料カード（２）



第８図　梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）にある倉光清六の書簡



第９図　『新編倉吉市史』掲載の墳丘測量図

埋葬施設　木棺埋葬の構造については、梅原資料カードに詳細な記録がある。発掘者である長田長一氏からの聞き取りを模式図で表現しており、被覆粘土と棺床粘土の間に、厚さ一寸（3㎝）ほどの黒色土層の堆積があったことを伝える。また、木棺東小口の礫構造について、その高さが60㎝程度におよんだこと、積み上げられた割石は棺底より一段高くなったところに位置することも記されている（第７図）。想像の域を出ないものの、割石積みより低い位置にある石材については、「朱層」上面にある点から外側に積み上げられた石材が棺内に転落したとも考えられ、割石積みは木棺小口を棺外からおさえる構造であった可能性がある。なお、棺底が墳頂下８尺（約2.4m）の位置にあったことも記載されている。

箱式棺については、報告ではその場所について言及されていないが、梅原資料カードには木棺埋葬の南西に直交方向に主軸をとるものとして記載されている（第６図中の「太田氏」付近）。

遺物の出土状況　木棺埋葬における遺物の出土状況については、倉光清六に書簡に注目すべき記載がある。その内容は、10年以上前（1913年以前）に多数の鉄製品が今回の遺物が出土した範囲のさらに西側から出土したというものである（第８図）。

箱式棺については、梅原資料カードに太田勝友委員からの聞き取りとして、1914（大正３）年に鉄鏃が40～50点、刀剣が棺内から出土したと記載されている。

（３）小　　結

梅原報告と梅原考古資料の検討をふまえ、現時点での所見をもまじえて伯耆国分寺古墳にかかわる古墳としての情報を総括しておく。

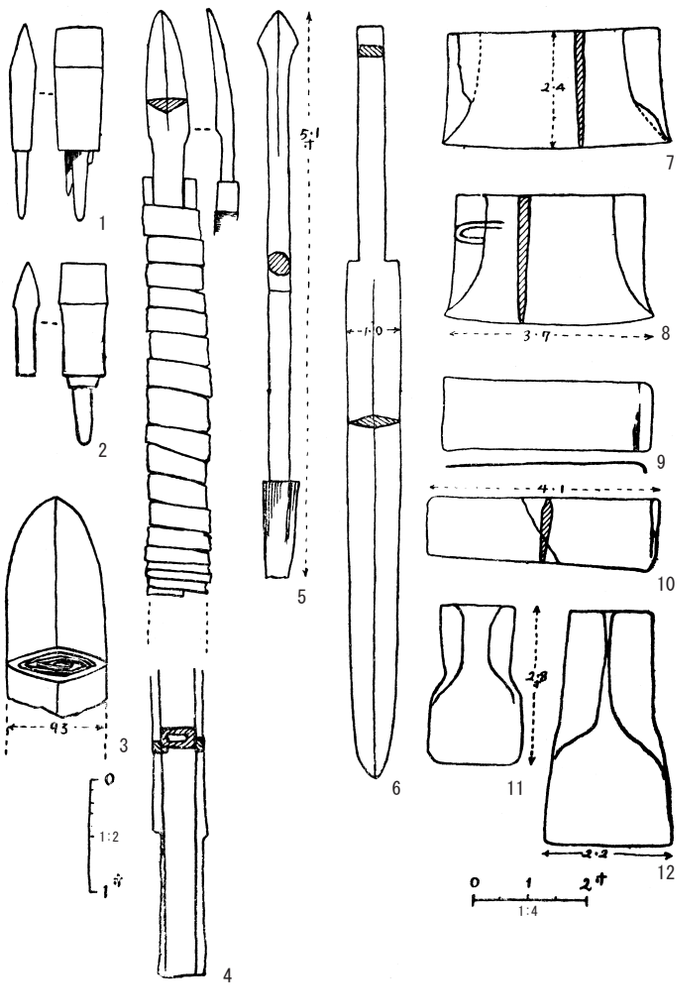
墳　　丘　現在の国分寺内にある墓地のなかに比較的明瞭な墳丘が残存する（第11図）。ただし、墳丘は土取りなどによって大きく削平される。墳丘は直径30ｍ程度の円墳である可能性もあるが、前方部に相当するような高まりの存在を考慮するならば、梅原報告の指摘にあるように前方後円墳とな

第 10 図　梅原報告にある伯耆国分寺古墳の墳丘（東から）

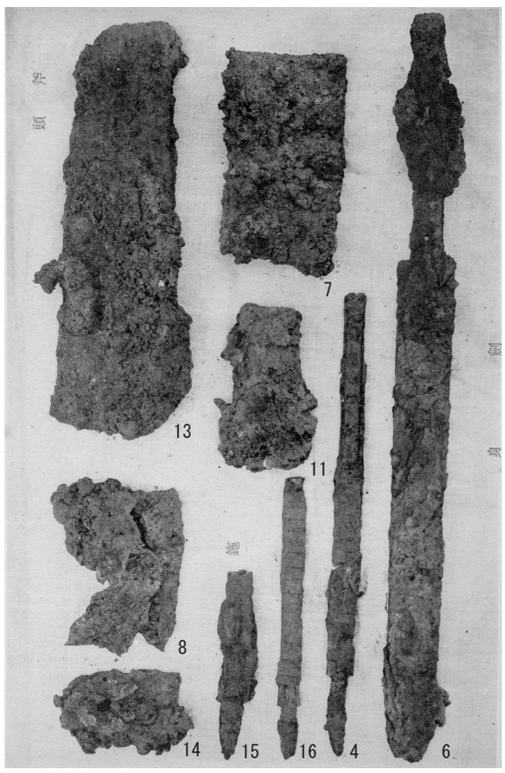
第 11 図　伯耆国分寺古墳の墳丘の現状（東から）

る可能性がきわめて高い。その場合、全長 60 m近い規模となる。ただし、その後の墳丘測量調査では、残存した墳丘が直線的なラインをもつことから（第９図）、前方後方墳である可能性が指摘されている〔新編倉吉市史編集委員会 1996〕。葺石ならびに埴輪はともなわない可能性が高い。

埋葬施設　埋葬施設は後円部に２基の存在を想定できる。中心の木棺埋葬には被覆粘土と棺床粘土が確認されるが、いわゆる粘土槨としうるかは難しい。木棺埋葬は墳丘主軸に直交する。その規模は、



第 12 図　梅原報告にある遺物実測図

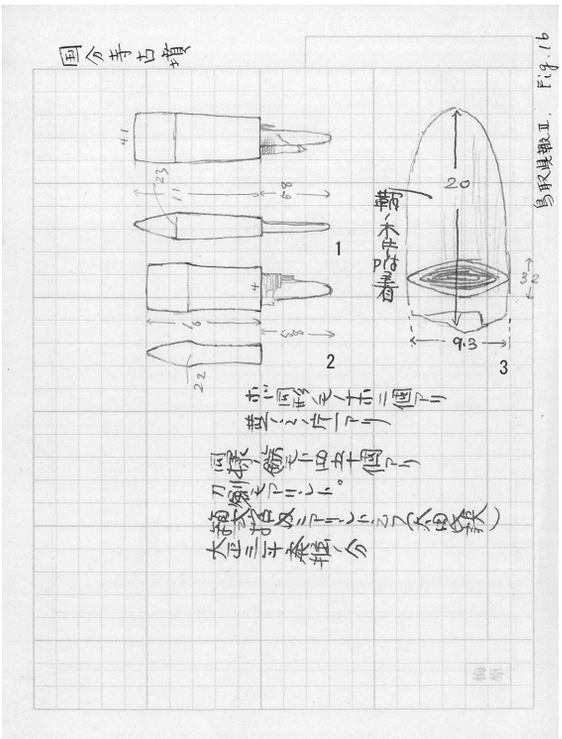


第 13 図　梅原報告にある遺物写真

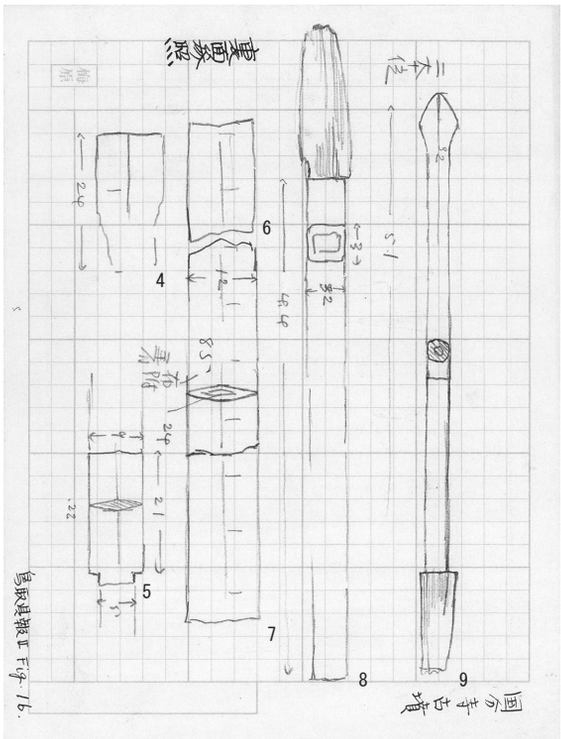
長さ約 7.2 m、中央部の幅約１.8 mとある。木棺はその痕跡から長さ 6.7 m程度と見込まれる。また、木棺東小口に割石積みをほどこす。梅原報告では刳抜式木棺をおさめたとするが、棺の幅が約 1.35m と広い点を勘案すれば、組合式木棺の可能性も否定できない。さらに、木棺埋葬の南西には箱式棺があり、副次的な埋葬として存在したようである。箱式棺の主軸は、木棺埋葬とは直交するらしい。

遺物の出土状況　木棺の中央付近より東側に鏡３面が主軸に沿って点在し、その近くに鉄剣（ヤリ）が配置される。鏡の位置から、この付近に遺体が東枕で葬られた可能性が高い。八鳳鏡と三角縁神獣鏡の鏡背面には鮮やかな赤色顔料が付着しており、被葬者の頭部の位置を反映するものと考える。もっとも東に位置する鏡の東側には刀剣類、木棺の東側の小口おさえとした礫に接して鉄製農工具（鉄鎌・鉄斧）が出土した。東小口から出土した農工具類については、小口おさえの礫と銹着していたものもあるとの梅原報告での記載からも、棺外副葬品である可能性が考えられよう。また、３面の鏡の西側には、若干の距離をおいて棒状の鉄製品（鉄鉇・鉄鑿か）が出土したと報告されている。さらに、その西側からはかつて多数の鉄製品が出土したらしい。なお、粘土槨とは別の箱式棺の内部から、鉄鏃や刀剣類が出土したとのことである。

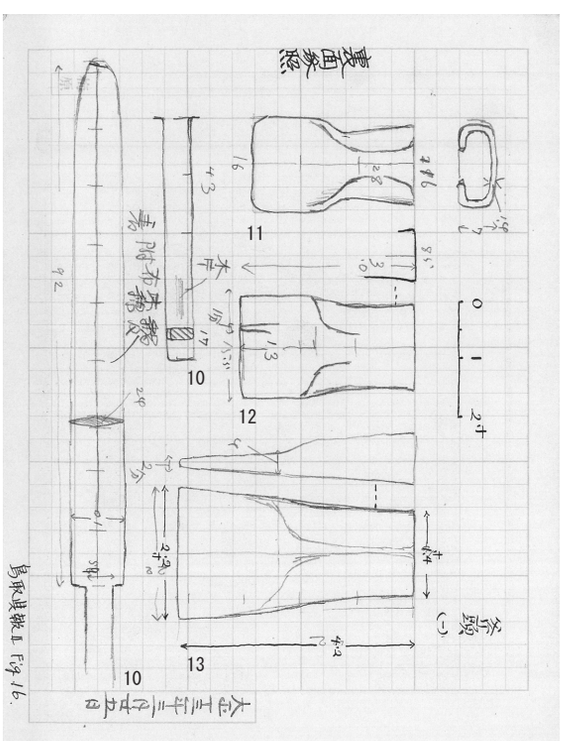
出土遺物　伯耆国分寺古墳では、木棺と箱式棺から副葬品が出土した（第12～15図）。木棺の副葬品は、銅鏡３面、鉄剣（ヤリ含む）３～４本、短刀１点、方形鍬鋤先３点、鉄鎌３点、有袋鉄斧３点、短冊形鉄斧１点、鉄鉇６～７点、鉄鑿２点とされる。このほかにも多数の鉄製品が出土したらしい。箱式棺の副葬品としては、鉄鏃数点（本来は 40 ～ 50 点ほど）、鉄剣１点（本来は刀剣多数）があるという。



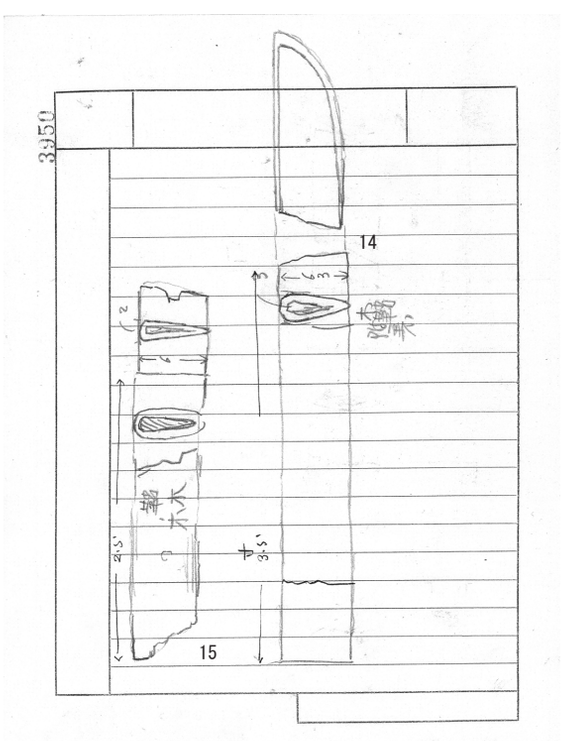
1　梅原考古資料の資料カード（3）



2　梅原考古資料の資料カード（4）

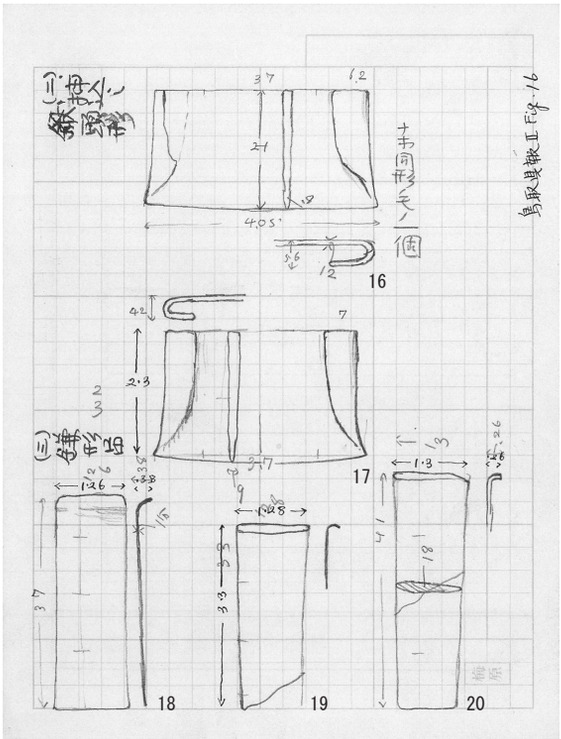


3　梅原考古資料の資料カード（5）

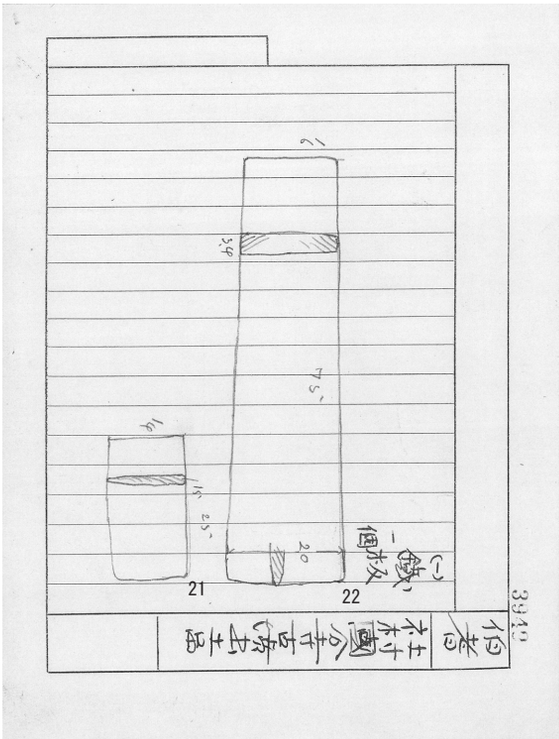


4　梅原考古資料の資料カード（6）

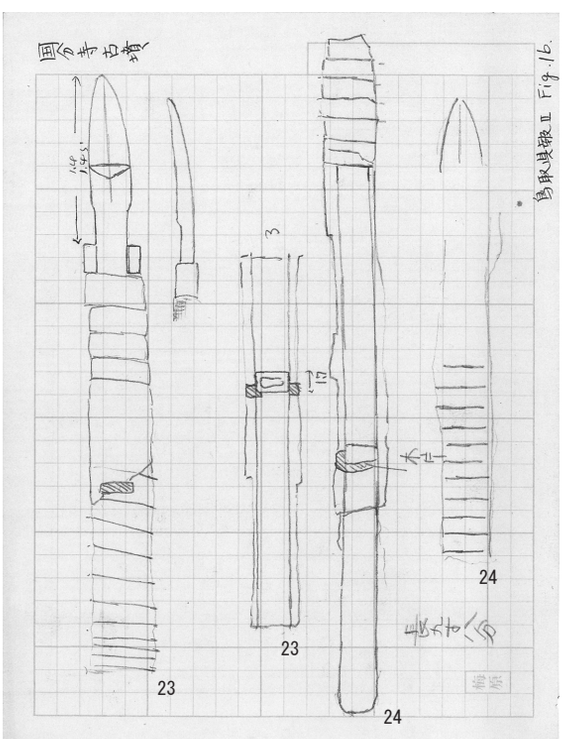
第 14 図　梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）にみる出土遺物の記録（1）



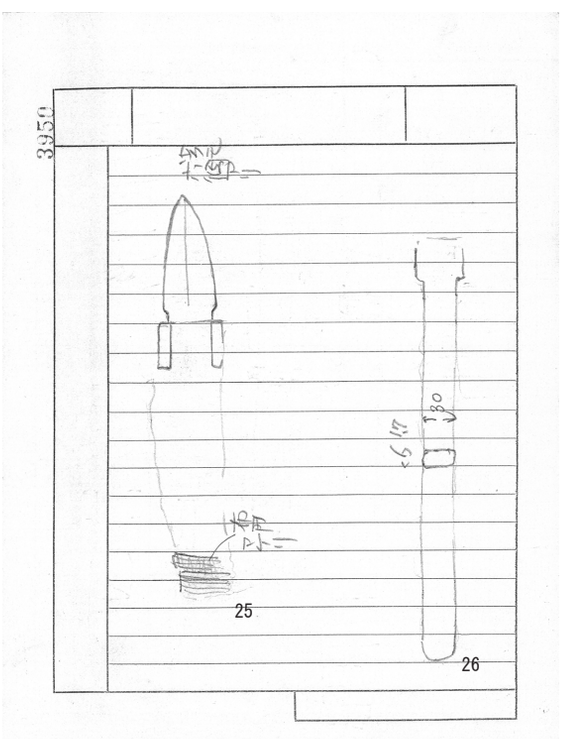
1　梅原考古資料の資料カード（７）



2　梅原考古資料の資料カード（８）



3　梅原考古資料の資料カード（９）



4　梅原考古資料の資料カード（10）

第 15 図　梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）にみる出土遺物の記録（２）

4　伯耆国分寺古墳資料の評価のあゆみ

（1）重要美術品認定から重要文化財指定まで

伯耆国分寺古墳の出土品は、その後、1935年5月9日に重要美術品[1]に認定される。ただし、その内容は、「鳥取県東伯郡社村字国府古墳出土品　銅鏡夔鳳鏡一、銅鏡獣帯四神二獣鏡一、銅鏡二神二獣鏡一」となっており、認定の対象は3面の鏡だけであった。この時点では、「国分寺古墳」という名称も使われていない。

やがて、1940年の皇紀2600年記念奉祝行事の一環として、鳥取県では『上代因伯史』などの刊行計画が立てられた。これは「上代因伯史を文化史的方面と考古学的方面とから調査研究して、向後二ヶ年半に完成するもの」とされ、その編さん委員に梅原末治、木山竹治、倉光清六、足立正らがかかわった。これらの人々は、鳥取県史蹟勝地調査報告『鳥取県における有史以前の遺跡』（1922年）、『因伯二國における古墳の調査』（1924年）にも深くかかわったメンバーであり、『上代因伯史』はこの2冊の続編として意識されていたようだ〔鳥取県埋蔵文化財センター2003〕。ただし、梅原はすでに47歳で京都帝国大学教授の職にあり、実務の多くを当時助手だった小林行雄に委ねつつあったようだ。敗戦に至る情勢の推移のなかで刊行計画が頓挫したのち、調査資料の多くは小林の手元で保管されていた。

『上代因伯史』がどのように資料掲載する予定だったのか、その具体的な編集方針は不明であるが、伯耆国分寺古墳出土品の場合、銅鏡以外の鉄製品も整理・報告が企図されていたことは、当時京都帝国大学の学生で、調査員であった坪井清足の述懐からもうかがうことができる〔鳥取県埋蔵文化財センター2003：7-8〕。戦後に小林が執筆した『日本考古学概説』（1951年）には、『上代因伯史』の調査成果と思われる鳥取県出土の考古資料が18点掲載されているが、伯耆国分寺古墳出土品としては、鍬先と鉇が「第21章　古墳時代の生活」で図示された〔小林1951：173〕。これは、本書で報告する方形鍬鋤先2（第22図）と、鉇12（第26図）と考えられるが、鉇は複数の個体の情報を集約して復元したものである可能性がある。

一方、戦後の文化財保護法（1950年）制定によって、戦前の文化財保護制度が廃止され、重要美術品は「当分の間」認定された価値が効力をもつとされたものの、新制度の元で重要文化財への「格上げ」が促されていった。伯耆国分寺古墳の出土品も、1959年6月27日に重要文化財に指定された[2]。指定の内容は「伯耆国倉吉国分寺古墳出土品　夔鳳鏡一面、三角縁神獣鏡一面、二神二獣鏡一面、附鉄剣、鉄斧頭等一括」となっており、「鳥取県」が「伯耆国」と表記されたこと、遺跡の固有名詞として「国分寺古墳」が用いられたこと、「獣帯四神二獣鏡」の名称が「三角縁神獣鏡」に変更されたこと、3面の銅鏡以外に鉄製品が「附」で指定の対象になったことが大きな変更点である。とくに、出土鉄製品が指定の対象に含められた背景には、『上代因伯史』における調査活動があった可能性が考えられよう。なお、鳥取県教育委員会が保管する指定関係の公文書綴には、指定直後に修復がおこななわれ、保存箱が新調されたことを示す文書がある。

現状の指定名称である「伯耆国分寺古墳出土品」は、1968年2月2日に名称変更したとの記録があるが、なぜ名称変更したのか理由や経緯はよくわからない[3]。現代的な文化財保護行政が充実していく中で、稀少性が高い宝物的遺物の単品指定から出土品を総合的に評価する方向に向かい、「附」を外したのかもしれない。ただし、名称変更にともなって、指定対象物件を個々に把握する作業まではおこなわれなかったようで、鉄製品は一括で指定対象にされたため、後述するように〔本書第3章：29〕、伯耆国分寺古墳の副葬品とは考えられない長頸鏃の一部も含まれることになった。

（２）既往の地域研究における位置づけ

伯耆国分寺古墳の編年的研究に先鞭をつけたものとしては、大村雅夫による 1961 年の論考があげられる〔大村 1961〕。大村は、伯耆国分寺古墳を馬ノ山４号墳に後続、上神大将塚古墳に先行する古墳とみなし、鳥取県中部で副葬品の質量ともに優れた古墳が連続的に築造されることから、鳥取平野や米子平野に優越する政治勢力が倉吉平野で育まれたものとみた。つづく 1966 年の『日本の考古学』Ⅳ古墳時代・上では、編年表内で伯耆国分寺古墳を馬ノ山４号墳よりも古く置くものの、記述としては馬ノ山４号墳に焦点を当てるにとどまった〔池田ほか 1966〕。なお、方墳、前方後方墳を伝統的に築く出雲と、前方後円墳を築く因幡・伯耆という対比的な特徴づけも、この段階で論じられている。同様の認識はその後も引き継がれ、伯耆国分寺古墳は、山陰独自の方形墳が築造される「前Ⅰ期」とは様相を異にする、「前Ⅱ期」に至って出現する「畿内型」前方後円墳の一つで、馬ノ山４号墳とは同段階に位置づけられた〔山陰考古学研究所 1978〕。

1991 年の『前方後円墳集成』中国・四国編では、集成編年３期に位置づけられる前方後円墳として記述されたが、前方後方墳である可能性も併記された〔松井・下高 1991〕。集成編年３期に位置づける根拠としては、仿製鏡を含まない鏡群という点で馬ノ山４号墳よりも古い副葬品組成であることに注意が促されつつも、埋葬施設が「粘土槨」であることをもって「ほぼ同時期に相前後して築造された」と考えられた。なお、伯耆国分寺古墳に先行する墳墓として三度舞大将塚古墳を指摘しつつも、弥生時代の方形墳丘墓の可能性が高いとし、他方、後続するものとして前方後円墳の大谷大将塚古墳、円墳の上神大将塚古墳（４期）をあげ、前期を通じて有力な古墳を連続的に築造した系列の重要な一角をなすとの理解を示した。

一方、1996 年の『新編倉吉市史』第１巻古代編では、伯耆国分寺古墳の残存墳丘の再測量の結果を示しつつ、前方後方墳であった可能性をより強く考慮する意見が出された。また、埋葬施設が「粘土槨」とされたことで「築造年代を不当に新しくされている」とし、円筒埴輪や葺石をもたず、中国鏡のみで構成される鏡群をもつ点などに注目し、山陰でもっとも早く造られた古墳と位置づけた〔名越 1996b〕。「粘土槨」とはいうものの通有のものとは異質な事例であり、それを編年根拠にすべきでないという名越の指摘はもっともであり、重要な指摘である。しかし、市史という書籍の性格上、時間軸上の位置づけを「４世紀初頭」と表現したのみで、他地域の古墳との並行関係にも言及しなかったためか、「最も早く」の理解が古墳編年の基準に照らしてどの位置にあたるのか、残念ながら共通理解を醸成することがなかったように思われる。

2000 年代になって、中国四国前方後円墳研究会などで各県の古墳編年が議論される段階になると、これ以前とは異なるレベルでの検討が必要となってきた。君嶋俊行や東方仁史は、新たに知られてきた古墳資料をとり込みつつ、伯耆国分寺古墳を含む鳥取県内の前期古墳の評価を広域的な編年軸のなかで模索した〔君嶋 2002・2005、東方 2007・2008〕。基本的には、集成編年３期・前期中葉という『前方後円墳集成』段階での評価を引き継いで、馬ノ山４号墳と同時期におく理解が定着したように見受けられる。その一方、墳形の点では『新編倉吉市史』の主張をとり入れ、前方後方墳として評価することが大方の支持を得られていった。

とはいうものの、基礎的な資料整理の不在が現状以上の議論を困難にしているといわざるを得ない。長らく写真や 1920 年代の実測図で資料提示されてきた伯耆国分寺古墳出土資料について、詳細な観察結果を添えた再実測図を提示し、伯耆国分寺古墳出土品の再検討をおこなった岩本崇の仕事は、この停滞を打ち破るものとして高く評価されよう。銅鏡はいずれも前期前半の古墳から出土してもおかしくない古相のものでまとまる一方、鉄製農工具類は前期後半から始まる要素をもつとし、古墳の年

代的位置づけは前期後半の古相段階とした。また、伝旧社村出土とされる古相の三角縁神獣鏡の存在にも触れ、伯耆国分寺古墳に近在し、かつ先行する古墳を予想し、上神大将塚古墳に至る一連の首長墓系列の中に位置づけた。一方、馬ノ山４号墳との関係は、三角縁神獣鏡の新古を元に伯耆国分寺古墳の方が先行するとみて、倉吉地域と東郷地域の間における首長墓系列の変動を読みとった〔岩本 2006〕。

最近では、伯耆国分寺古墳と馬ノ山４号墳の関係について明確に年代差があるとみて、馬ノ山４号墳を上神大将塚古墳と同じ段階に下げる考え方も提示されている〔松山 2016〕。なお、表採された土器や埴輪の観察をもとに、馬ノ山４号墳には鰭付円筒埴輪がともなうこと、宮内狐塚古墳が先行する可能性があることなどが指摘されており〔東方ほか 2017〕、伯耆国分寺古墳と馬ノ山４号墳の年代差はより確実になったと考えられる。その一方、伯耆国分寺古墳と対比しうる古墳として全長 95m の宮内狐塚古墳が存在することとなった。馬ノ山古墳群に未調査の前方後円墳が多いことを考えると、三角縁神獣鏡を保有し続ける古墳系列が東伯耆地域で並列した状況も想定できることから、これまでの解釈の枠組みも変えなければならないだろう。また、円筒埴輪や葺石の有無、埋葬施設の構造にも違いがあり、古墳の性格も大いに異なる可能性がある。編年上の問題もさることながら、小地域ごとの古墳群の展開の中でどう位置づけるか、系譜論、性格論も重要な論点となろう。

伯耆国分寺古墳の編年上の位置や地域的性格を議論するためには、周辺地域の古墳出土資料の丹念な再整理・再検討が必要であるとあらためて痛感する。本書は、古墳からみた地域研究を推進するうえで、基礎となるべき情報を提供すると考える。従来とは異なるレベルの議論を可能とするが、それに見合うだけの調査・研究の充実が必要とされてもいる。

註

（１）重要美術品とは、1933（昭和８）年の「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」によって文部大臣が歴史上または美術上重要な価値を有すると認定した物件で、1929（昭和４）年の「国宝保存法」によって国宝に指定された文化財以外の海外流出防止等を主な目的とした。

（２）重要文化財に指定されたことについては、1959（昭和 34）年３月 30 日付の文化財保護委員会事務局長から鳥取県教育長宛の文書（文委美第 16 号）で通知があり、1959（昭和 34）年６月 27 日に官報告示された。

（３）重要文化財指定の際に、所在地名に過ぎない「鳥取県」をわざわざ「伯耆国」に修正したのは、「国分寺」の文字が続いたからではあるまいか。その後、指定内容と名称変更の際、継続性を図ってか、国分寺の名称に旧国名を冠して「伯耆国分寺古墳」の名称に変更されたと思われるが、古墳名としては「国分寺古墳」の使用例がもっとも多い。

引用文献

池田満雄・大村雅夫・門脇俊彦・近藤　正　1966「山陰」『日本の考古学』Ⅳ古墳時代・上　河出書房新社　pp.225-254

岩本　崇　2006「伯耆国分寺古墳の再検討」『大手前大学史学研究所紀要』第６号　大手前大学史学研究所　pp.123-142

梅原末治　1924「因伯二國における古墳の調査」『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第２冊　鳥取縣

大村雅夫　1961「鳥取県における地域政治集団の形成過程」『考古学研究』第８巻第１号　考古学研究会　pp.10-20

君嶋俊行　2002「因幡・伯耆における前期古墳の様相」『山陰の前期古墳』第 30 回山陰考古学研究集会資料集　山陰考古学研究集会　pp.48-51

君嶋俊行　2005「因幡・伯耆における首長墳の消長」『前半期の首長墳の消長』第 10 回中国・四国前方後円墳研究会　中国・四国前方後円墳研究会　pp.39-45
倉吉市教育委員会　1975『伯耆国分尼寺・官衙跡発掘調査概報』倉吉市文化財調査報告書第６集
倉吉市教育委員会　1976『宮ノ下遺跡発掘調査報告』倉吉市文化財調査報告書第 10 集
倉吉市教育委員会　1979『大宮古墳発掘調査概報』倉吉市文化財調査報告書第 15 集
倉吉市教育委員会　1980『上神猫山遺跡発掘調査報告』倉吉市文化財調査報告書第 17 集
倉吉市教育委員会　1981『上米積遺跡群発掘調査報告Ⅱ　―阿弥大寺地区―』倉吉市文化財調査報告書第 20 集
倉吉市教育委員会　1983a『四王寺遺跡群　イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 25 集
倉吉市教育委員会　1983b『四王寺地域遺跡群遺跡詳細分布調査報告書　上野遺跡・屋喜山９号墳・四王寺地域遺跡群』倉吉市文化財調査報告書第 28 集
倉吉市教育委員会　1985a『上米積遺跡群遺跡発掘調査報告書Ⅳ　後ロ谷遺跡・後ロ中尾遺跡・箕ヶ平遺跡』倉吉市文化財調査報告書第 30 集
倉吉市教育委員会　1985b『倉吉市内遺跡群分布調査報告書Ⅱ』倉吉市文化財調査報告書第 35 集
倉吉市教育委員会　1985c『取木・一反半田遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 37 集
倉吉市教育委員会　1985d『四王寺遺跡群　西山遺跡・桜木遺跡発掘調査概報』倉吉市文化財調査報告書第 38 集
倉吉市教育委員会　1986a『観音堂遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 39 集
倉吉市教育委員会　1986b『大谷・後ロ谷墳丘墓発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 40 集
倉吉市教育委員会　1989a『北面遺跡群　イキス遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 56 集
倉吉市教育委員会　1989b『養水遺跡群　養水古墳群・上養水遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 58 集
倉吉市教育委員会　1992a『柴栗古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 67 集
倉吉市教育委員会　1992b『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 69 集
倉吉市教育委員会　1995a『長谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 76 集
倉吉市教育委員会　1995b『二タ子塚遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 82 集
倉吉市教育委員会　1996a『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 84 集
倉吉市教育委員会　1996b『不入岡遺跡群発掘調査報告書　不入岡遺跡・沢ベリ遺跡２次調査』倉吉市文化財調査報告書第 85 集
倉吉市教育委員会　1997a『下張坪遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 88 集
倉吉市教育委員会　1997b『両長谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 89 集
倉吉市教育委員会　1998a『中峰古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 94 集
倉吉市教育委員会　1998b『向野遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 95 集
倉吉市教育委員会　1998c『河原毛田遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 96 集
倉吉市教育委員会　2002『高原遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 113 集
倉吉市教育委員会　2003『向野遺跡第２次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 114 集
倉吉市教育委員会　2004『向野遺跡第３次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 121 集
倉吉市教育委員会　2008『史跡伯耆国府跡国庁跡発掘調査報告書（第８～ 11 次）』倉吉市文化財調査報告書第 130 集
倉吉市教育委員会　2009『沢ベリ遺跡第４次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 134 集
倉吉市教育委員会　2011『伯耆国府関連遺跡　古神宮地区第３次』倉吉市文化財調査報告書第 138 集
倉吉市教育委員会　2012『東前遺跡・茅林遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 140 集
倉吉市教育委員会　2016『ドウ々平遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 146 集
倉吉市教育委員会　2017『中尾遺跡第２次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 150 集
倉吉市史編纂委員会　1973『倉吉市史』倉吉市
小林行雄　1951『日本考古学概説』東京創元社

眞田廣幸　1988「鳥取県クズマ遺跡」『日本考古学年報』39　日本考古学協会
眞田廣幸　1996「瓦礫が語る郷土の歴史」『新編倉吉市史』第１巻 古代編　倉吉市　pp.419-451
山陰考古学研究所　1978『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ―東伯耆Ⅰ・東郷池周辺―』山陰考古学研究所記録第２
新編倉吉市史編集委員会　1996『新編倉吉市史』第１巻 古代編　倉吉市
高田健一　2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報』2002　鳥取県教育委員会　pp.34-43
竹中孝浩　1996「弥生時代の集落」『新編倉吉市史』第１巻　古代編　倉吉市　pp.91-99
中四国縄文研究会鳥取大会実行委員会　2013『中国地方における縄文時代の落し穴』中四国縄文研究会
鳥取県埋蔵文化財センター　2003『上代因伯史　考古編―京都大学考古学研究室遺跡調査資料集―』鳥取県教育委員会
名越　勉　1996a「古墳出現の前夜」『新編倉吉市史』第１巻 古代編　倉吉市　pp.125-160
名越　勉　1996b「前方後円墳の時代」『新編倉吉市史』第１巻 古代編　倉吉市　pp.161-186
根鈴智津子　1991「向山古墳群宮ノ峰支群の発掘から」『文化財だより』第 22 号　倉吉文化財協会　pp.4-6
根鈴輝雄　1996a「旧石器時代」『新編倉吉市史』第１巻 古代編　倉吉市　pp.3-25
根鈴輝雄　1996b「群集墳から古墳の終末へ」『新編倉吉市史』第１巻 古代編　倉吉市　pp.216-240
松井　潔・下高瑞哉　1991「伯耆」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社　pp.39-45
松山智弘　2016「山陰」『前期古墳編年を再考する～地域の画期と社会変動～』中国四国前方後円墳研究会第 19 回研究集会　中国四国前方後円墳研究会　pp.61-78
森下哲哉　2017a「津田峰遺跡」『新鳥取県史』考古１ 旧石器・縄文・弥生時代　鳥取県　pp.216-217
森下哲哉　2017b「松ヶ坪遺跡」『新鳥取県史』考古１ 旧石器・縄文・弥生時代　鳥取県　pp.210-211
東方仁史　2007「因幡・伯耆」『前期の中の画期』第 11 回中国・四国前方後円墳研究会　中国・四国前方後円墳研究会　pp.45-50
東方仁史　2008『企画展　因幡・伯耆の王者たち』鳥取県立博物館
東方仁史・君嶋俊行・岩垣　命・中原　斉　2017「東郷池周辺大型前方後円墳の埴輪」『調査研究紀要』８　鳥取県埋蔵文化財センター　pp.71-86

挿図出典

第３図：国土地理院発行 1 /25,000 地形図をもとに作成。
第４・５・10・12・13 図：梅原 1924 を改変。
第６・７・８・14・15 図：梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）。
第９図：新編倉吉市史編集委員会 1996 掲載図を改変トレース。